校内研究通信

守破離

NO.１２

アドラー心理学

突然ですが、アドラー心理学はご存知でしょうか。アドラー心理学の「課題の分離」では、ある課題を放置した時に最終的な結末を引き受けるのは誰かという観点から、自分の課題と他者の課題を分け、他者の課題に介入しないことを説きます。木村はこの考えを、本日の家庭科の研究授業を参観しながら想起していました。

木村が見ていたグループの議論の初期段階では、子供たちは「ポスターで注意する」「罰則を厳しくする」といった、他者の行動を変えようとする解決策に固執していました。これはアドラー心理学でいう「課題の分離」ができておらず、他者の課題に土足で踏み込もうとする状態です。

しかし、「効果的かどうか」を追求するほど議論がストップしてしまうという「認知的葛藤（ゆらぎ）」に直面していました。

この葛藤を経て、ある児童は以下のように振り返りました。

「〇班ではゴミに関するプロジェクトを行った人が多くて、ごみを減らすにはどのような行動が効果的なのかを中心に考えました。（中略）次に私たちができることを考えるときも、『効果的かどうか』を考えると、話し合いがストップしてしまって、まずは自分がポイ捨てをしないことから始め、ポイ捨てをしない人を増やしたいと思いました。」

この言葉は、他者が捨てるかどうかという「他者の課題」への執着を手放し、自分がどう生きるかという「自分の課題」に焦点を定めた、本質的な変容を表していると分析しました。罰則や防犯カメラといった外発的なルールに頼るのではなく、内発的な動機に基づき「自分ができること」から社会に働きかけようとする姿は、本研究が目指す「実行力」が中動態的なプロセスを経て結実しようとする瞬間であると言えるのではないでしょうか。

この「自分の課題（主観）」を起点とする学びは、図画工作科の実践にも表れていました。子供たちが絵を竹串に貼り、押出法ポリスチレンフォームに立てて空間を形成する中で、自分の分身をつくり、友達の作品世界へと遊びに行く姿がたくさん見られました。１枚の完結した平面作品であれば、子供はそれを客観的に「見る」ことから始まります。しかし、複数の絵が空間の中に立ち並ぶことで、そこには前後・左右という空間が生まれ、子供が自分の分身を投影できる「主観的な経験の場」が立ち上がります。だからこそ、子供たちはその世界に深く入り込み、他者と感性を働かせ合うことができたのではないでしょうか。

AI が客観的な最適解を提示できる時代において、研究二年次は「一人一人の経験や主観」に価値を見いだします。これは、他人の期待に応える（他者の課題を生きる）のではなく、自分自身の感覚で世界を捉え直すプロセスを重視するものであり、アドラーの「嫌われる勇気（＝自分の課題に集中する勇気）」とも通じるのでは、と考えた次第です。

（木村　仁）